The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フィリピンにおけるコリアン・ディアスポラのジェンダー関係とその変容
Author(s)	渡邉, 香奈子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/49208
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏　　名	渡邉(久津美)香 奈 子（わたなべ くつみ かなこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（学　術）
学 位 記 番 号	第　２２３０７　号
学位授与年月日	平成 20 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学 位 論 文 名	**フィリピンにおけるコリアン・ディアスポラのジェンダー関係とその変容**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　津田　　守 （副査） 教　授　西村　成雄　　教　授　南田みどり　　教　授　高山　正樹 広島国際学院大学専任講師　高畑　　幸

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、フィリピンで生活しているコリアンをディアスポラと総称している。なぜ、フィリピンにコリアンが定住するようになったのであろうか。それは、資本のグローバル化の一つの現象であるといえる。それも、ジェンダー化されたグローバリゼーションの中で生じていることである。本研究が目指すことは、資本のグローバル化によるひとつの現象を、ジェンダーの視点から読み解くことである。

そこで、着目したのが、韓国企業のフィリピン進出に伴う家族単位の移動についてである。資本のグローバル化が、各個人の生き方にどのような影響を及ぼしているのであろうか。国境をわたることで、家族そのものがそれまでとは別の環境に置かれることになる。その国の文化や社会的な影響によって、家庭内の力関係に変化が生じ、新たな価値観が生まれているのではないだろうか。フィリピンでの暮らしが韓国の伝統的な社会規範ばなれを促し、韓国固有の価値観に基づく夫婦関係ではなく、より対等な関係へと変容しているのではないだろうか、といったことが本研究の問いである。フィリピンの都市部における家族同伴型移動の事例を具体的に考察した。

では、なぜ配偶者関係に着目するのか。それは、婚姻関係や恋人関係にある男女間では、ジェンダー化がより強固に促されるということがあるからだ。どのような人と結婚するか、それは両者にとってその後の人生を大きく左右するものである。経済状態、精神面での心理状態、健康状態など、さまざまな出来事を共にするものとなる。本来ならば、自身の能力を開花させることができた状態であったのが、夫婦関係が原因のため、自己実現ができない状況に陥り続けることもある。

夫婦という特定の関係において、新たなジェンダー関係をいかにして創出できるのだろうか。伝統的なジェンダー規範に基づく男らしさ、女らしさという固定的な価値観から、一人ひとりが自由になっていく。それが新たなジェンダー関係の創出である。

本研究の特徴は、資本のグローバル化、すなわち企業の海外進出に伴って生じる家族内の問題を対象にしていることである。これを、企業進出の側面とコリアン個人のライフ・ストーリーという、二方向から考察することは、従来の研究とは異なる観点である。

ではなぜ、フィリピンに韓国企業が進出するようになったのであろうか。フィリピンは、およそ 400 年近くも、ス

ペイン、アメリカ、日本による外国の植民地下にあった国である。戦後、フィリピンに諸外国からの人々の定住化がみられるようになったのは、外国資本を積極的に導入するようになった頃からである。

フィリピンは経済開発の主軸として、1960 年代後半から輸出加工区を設立し、アメリカ系や日系など、先進工業国の企業が相次いで進出するようになった。このような外資導入政策は、大挙して外国企業の進出を促した。現地資本と合弁で工業製品や農産物を生産し、フィリピンから世界各国へ輸出するという、輸出志向工業化に転換していった。

本研究で対象としているコリアンもまた、このようなフィリピンの工業化政策の波にのって、1980 年代後半以降からビジネスを主として入国するようになった人々である。同時に、韓国国内の経済状況にも端を発している。1980 年代、韓国では賃金の上昇、労働力不足、韓国ウォンの対ドルレート上昇などの問題が浮上したことから、特に労働集約型産業が海外へ生産拠点を移転せざるをえなくなったからである。

グローバルな規模でコリアンが居住している国家のうち、フィリピンは東南アジアの中で最も人口が集中している。コリアンの大半が家族同伴で入国したため、定住化がみられるようになった。また、そのような家族を商売相手にする自営業者の入国も目立ち始めた。韓国でしか購入できなかった生活必需品をフィリピンでも容易に入手できる環境が整うようになり、自ずとコリアン・タウンが形成されていったのである。彼らは家族を同伴する長期滞在者であり、かつホスト社会に基盤を築いており、コリアン・ディアスポラ社会を形成する重要な役割を担っている。

そもそも、本研究は次のような経緯から取り組み始めたものである。筆者が学部生の頃、1993 年 8 月から 10 月にかけて、フィリピンにおける韓国企業の進出について調査をおこなった。

当時は、韓国企業 31 社を訪ねた。カビテ輸出加工区、バタアン輸出加工区、ラグナ国際工業団地を訪ね、コリアン経営者 31 人（男性 30 人、女性 1 人）およびフィリピン人生産現場労働者、事務職員、幹部職員、計 124 人（男性 46 人、女性 78 人）へインタビューとアンケート調査を実施した。

その調査の際、近隣のホテルに滞在したこともあれば、コリアン社長宅にも宿泊し、妻、子どもたちの生活に接する機会を得ることができた。また、フィリピン人従業員寮でも、フィリピン人労働者と寝食を共にしながら、生産現場に同行し、作業を手伝う参与観察をおこなった。

その後、1995 年から 1996 年にかけて、修士論文において、韓国進出企業の経営実態について調査をおこなった。これは、フィリピンにおける年間売上金額上位 7000 社にランクされた、韓国企業 83 社および、商社、銀行など 13 社の計 96 社（男性 88 人）を対象に、直接、コリアン経営者へインタビューを実施した。

筆者が過去の研究で対象とした男性ビジネスマンは、日曜日には必ず、キリスト教会での礼拝を欠かさない信仰熱心なクリスチャンが多かった。筆者も毎週、コリアンたちが集うキリスト教会の礼拝に出席した。彼らは、皆、家族同伴で出席しており、ビジネスの実態と共に、プライベートな様子を伺い知ることができた。

やがて、筆者の関心は、海外企業進出研究から、コリアン・ディアスポラ社会の形成に広がり、2001 年 7 月、最大の社会組織である韓人会の会長を初めとする、各種協議会の代表者 26 人（男性 21 人、女性 5 人）にインタビューをおこなった。ビジネスの傍らボランティア活動を通じて、フィリピン人と接点を持っており、別の姿もありありと見えてきた。

そして、それまで筆者自身が、男性の語りからしかとらえていなかったコリアン・ディアスポラの存在を再構築すべく、2003 年 1 月から 2 月にかけて再度フィリピンへ行き、コリアン女性を中心にライフ・ストーリーを聞き取る作業をおこなった。韓国婦人会、宣教師協議会傘下の師母分科会（宣教師夫人による分科会）、韓国学校 PTA などの協力のもと、主に女性たちを対象に、彼女たちのライフ・ストーリーを収集した。

1996 年までのインタビューを通じて、いくつか気がついた点があった。その一つが、男性は果敢にフィリピンでビジネスに取り組んでいるが、妻は夫の身の回りの世話をして情緒面からも支え、子どもにとっての良き母であること以外の顔が見えないという印象であった。夫は出国前と変わらずビジネスをしているが、女性は大きな変化の中にいるようにみえた。

現在、フィリピンのコリアン・ディアスポラ社会は、ビジネスマンとその家族によって形成されてきたといっても過言ではない。女性たちは妻として、母として、家族を支え、韓国企業のフィリピン進出を支える役割も担っていた。

調査対象としたフィリピンのコリアンは、思春期を韓国で過ごしてきた人々である。1930 年代から 1970 年代生ま

れと年齢層の幅は広いが、大半の人々が、韓国が軍事独裁政権の時代、またその残像のある時代に多感な青春期を韓国で過ごした人々である。

その時代、韓国は、儒教を背景とする民族教育が熱心に行われ、また、家父長制に基づき男性は生産労働に、女性は家庭内のことをする再生産労働という概念が、家族形成や、就業にまで大きく影響していた時代である。

儒教の文化背景の中で育ったコリアンが、人生の途中段階に国境を越えて、生活拠点を海外へ移すことになった。それまで内面化し続けてきた、理想とされる男らしさ、女らしさの意識を変化させ、新しい経験を積み重ねている。本研究では、コリアン・ディアスポラの男性、女性の意識が相互作用することによって、それぞれの生き方が多様に変化し、韓国本国とは違った新しいジェンダー関係のあり方に注目した。

ライフ・ストーリーを考察する上での筆者の問題意識は大きく３つに分けられる。第一にフィリピン入国の際の意思決定は誰にあったのか。その時、どのようなジェンダー役割規範がみられたのか。住む国がかわるということは、人生の目標や計画に大きな影響を及ぼすことになる。誰の意思決定によって、フィリピンに来ることになったのかということは、入国段階でのジェンダー関係のあり方を考察する手がかりになる。

第二に、海外移住によって、家族内部のジェンダーに基づく関係性がどのように既婚女性、男性たちの生活を規定しているのだろうか。フィリピンで生活しているコリアンの場合、夫婦、子どものみで舅姑の同伴はほとんどない。フィリピン移住後は家族形態が変わり、自ずと家族内の勢力構造も変化することになる。また、移住は必然的に、家族外部で接触する社会そのものが違う。家族員を媒介として、家族外部のフィリピン社会に適応しながら吸収したものが家族内部に取り入れられる。そのような日常が、家族内における地位と役割にどのような変化を生じさせているのだろうか。

第三に、フィリピン入国後の生活の変化についてである。夫の場合は、社会的な下降移動というものがないが、韓国で働いていた妻は仕方がなく辞職しているケースがみられる。妻はフィリピンで専業主婦になるか、もしくは夫の仕事の手伝いをするか、自ら自営業をはじめるなど、男性と比較すると大きく生活が変化することになる。夫のフィリピンでの仕事は、韓国での仕事の延長線上にある。よほどの理由がない限り、夫の場合は、フィリピンにおける社会的地位の下降をほとんど経験することはない。この社会的な地位の下降という経験の中には、ジェンダー関係の再生産という構造も含まれている。これらの問いから、コリアンの意識の変化をひろいあげ、ジェンダー関係の変容について考察する。

本研究で取り上げるコリアンの場合、フィリピンという異国で暮らしながら、韓国とは異質の文化や習慣に浸ることになった。女性の社会的な地位が高く、男女関係が相対的に平等とされるフィリピン社会においても、現実とは必ずしも一致しないようなジェンダー役割観がないとはいえない。しかし、男性が主導であることがあたりまえであった韓国と、フィリピンとでは異なる価値観、習慣がいくつもある。

本論文の構成は次のようである。第１章において、上記で説明したような本研究の課題と方法を述べる。第２章では、先行研究の整理と分析枠組を提示した。第３章では、韓国側の統計資料をもとに、韓国からフィリピンへの出国者数について考察した。ここでは、ジェンダー化された人の動きを確認した。第４章では、韓国資本のグローバル化現象について、コリアン男性ビジネスマンの置かれた状況と意識の変容について考察した。第５章では、社会組織活動によって、フィリピン社会であらゆる人々と共存する道を模索している姿を示した。第６章では、コリアン夫婦におけるジェンダー関係の変容について、ライフ・ストーリーから分析した。第７章では、全体をまとめ、今後の課題を述べた。

本研究では、ジェンダーによる格差を前提とした人間関係から、ひとりの人間としての存在が認められる実質的な関係へと変容していく過程を明らかにした。

論文審査の結果の要旨

本論文は、フィリピンに在住するコリアンの間のジェンダー関係に着目して、グローバル化の中で同国に生活をするコリアン（著者は、これをコリアン・ディアスポラと呼ぶ）の間で、男性が主体の移動形態とそこから様々な社会

組織が生成したことを分析するとともに、徐々にコリア・ディアスポラ社会内部の関係変化が現れ、その夫婦関係においても変容のあることを解明した。前半では豊富な統計や現地調査によるデータを駆使し、後半では多数のコリアンへの長時間に及ぶインタビューをもとに具体的な意識と行動を類型化した。多大な労力をかけた跡の見られる労作である。とりわけ、ライフ・ストーリーからの分析という独自の研究スタイルを確立していることは高く評価できる。

しかし、以下のような問題点も指摘される。膨大な論文ということもあってか、全体を通じて冗長感が否めない。鍵となるいくつかの概念の使い方に改善できる点がある。分析という観点からは論理性においてやや手薄である。類型化についてもさらなる検討の余地を残している。

このような課題もあるが、著者が既にいくつかの研究業績を出していること、にもかかわらず本論文において新たなる試みを行おうという意欲が強く伝わってくる。以上を考慮すると、今後の発展が十分に期待できるという意味でも本論文は博士号を授与する水準に達しているものと判断される。